

槐

かい

岡井省二創刊

平成21年12月号

平成二十一年十二月一日発行 第十九巻第十号 通巻第三二二号 毎月一回 日発行
平成三年九月十八日第一種郵便物認可



踊る

高橋将夫

秋はものみなはればれとミントの香
あつさりと口を割りたる栗の毬
私ならそこには置かぬ鴉の贄
秋螢自らなぐさめることも

蒼天の白波となり秋の雲
松茸を焙りて青き炎かな
空き缶を蹴れば飛び出すちちろ虫
母と子と妻のためなり障子貼る
砕け散る前に引きたる秋の波
上り築のがれて下り築にあふ
大日が呼びにくるまで踊るなり

槐安集

水野恒彦

白鯉のたましひに秋すすみけり
一睡の夢より覚めて鶉籠
迢空忌怒涛にふれし銀河の尾
前山に竹伐って人残りしよ
夜を徹とほしもの書く音と秋の霜

延広禎一

松岡節子先生
羽衣に菊の香まとひ翔けゆけり
無量寿や飛白に弾ぜる萩の花
阿波踊魂呼び合へる手振りかな
天網と衣笠茸の網目かな
婆沙羅の日のたりの日々や月天心



加藤みき

満月やこんこんと眠る人の顔
天の川やんちやな人を掌に
秋茄子を家内一同よばれたり
まなかひの黄道光なり衣被
雁や法円坂のハイウエー

石脇みはる

はんざきやのらりくらりと答へをる
不退寺や二つに裂けし赤荔枝
天高し風船ダツグは水の上
アクアライナー秋の漣ひきつれて
望の月ビル黒々と林立す

中島陽華

大阿蘇の野に馬並ぶ赤とんぼ
木鶏のコンと音あり秋の風
のつたりと白馬出で来し銀杏散る
秋蟬や花の 凶柄の 柩もて
菊花の宴火の鳥のオブジエあり

栗栖恵通子

おはじきのコチンと釣瓶落しかな
満月を抱へて卑弥乎やつて来る
座布団を十枚貰ふ秋うらら
猿酒小指なんぞを立ててをる
秋天や炙つて盛つて出世魚

竹内悦子

土砂降りの一つ葉にある胞子かな
にんげんが好きでいちじく熟れてをる
秋桜のそこより蒼き空と海
山葡萄濃きむらさきに垂れてをり
蓮の実のいのち伸ばしてをりにけり

大島翠木

夕かなかな水音消さぬ遠さにて
省二忌の闇へ五六歩ふじばかま
底に棲むさかなや葦や水澄めり
昼の虫傘立てに傘一本かな
冬瓜や埴輪手を上げ口開けて

雨村敏子

蓮穴に雨水溜れる二十日かな
立花なす鬼灯墓を明るうす
黒ぶどうあなたの過去は問ひませぬ
円周率の果ては海神わたつみ天の川
字余りのやうなひと日や月涼し

小形さとる

檜山の秋に入りたる鼻ひとつ
漆の実転ぶ処まで転びけり
廁にて密林の月想ひをり
月天心ホンガリと口開いてをる
猫ともども双脚伸ばす望の夜

本多俊子

梨かじる幼子白き音たてて
蝦蟇えびづるや水の星には水の神
稜線に光るものあり秋立てり
二百年の柱受けとめ秋の暮
月の神見えざるものを照しけり

久津見風牛

遠近と足を運びし亀鳴けり
脳天のミソ減らしぬる蝶の夏
身体の水つき足して秋に入る
性分つ器管ありけりいぼむしり
沈みぬる孕み鯉を見てをりぬ

近藤 きくえ

八朔や汀の文字のありがたう
望の潮鯉を抱きてをりにける
気楽さのうらはらありて衣被
ゆれてみて手ざはりたしか草は穂に
南瓜のスープリに友の心かな

近藤 喜子

始祖鳥の空の青さや秋気澄む
すすき野や詩歌の神に会ひに來し
逆光の師と出会ひたる花野かな
発心の声となりたる秋の蟬
内観の深まる二十三夜かな

谷村 幸子

母をりし心地のしたる大花野
目の前の芒にふれて山を見し
誘はれて八幡さまの椎拾ふ
阿字池に塔の写りて天高し
鹿角かこの杖挿す六波羅秋日和

瀬川 公馨

虎杖の世界を敵にまはしけり
こつねんと消滅したる蟬のこゑ
深紅の胎児宿してゐたる蕩枝かな
レフテイのひつぱりだこの晩夏なり
月夜にてシヨパンのコーダ無窮動

槐市集

富松寛子

檸檬齧る記憶の中の小抽斗
点滴の窓のパノラマ秋の雲
遠花火まどかなるもの身に宿る
コスモスの黄へりハビリの電子音
灯を消して心経誦誦夜の秋

中 貞子

里芋の花に雨音ありにける
いつも逢ふ案山子の顔のもへ字かな
曼珠沙華浮世の色に染まりける
鶏頭の光を浴びて種を吐く
折鶴の飛ぶかも知れぬ良夜かな

中島昌子

秋冷や海馬めざめてをりにける
京の水しかと切りをり新豆腐
新涼やみじかき言葉交しける
新米や何はさて措き塩むすび
外に出て今日を忘るる星月夜

中田禎子

葬の席祝の席に胡蝶蘭
足早に米寿の翁秋遍路
巻寿司の切腹したり秋の昼
三輪山の裾めぐり来て隼人瓜
変革の瑞穂国や蚯蚓鳴く



槐集

高橋将夫選

限りなき食物連鎖蚯蚓鳴く
寝屋川 前田美恵子

古酒の味したためてをり大人気分
独身ひとりとはこんなもんかい障子貼る

人生の半ばは過ぎし唐がらし
枯蝻螂争はずして去りにけり

龍淵に潜むや玉子安売りす
京都 竹中 一花

鏡面も鏡中も白秋闌ける
悲愴曲終り色づく紅葉かな

吐息から生るる千色や大花野
寿の字の裏側の秋思かな
自然薯の曲りに訳のありにける
摂津 中田 禎子

破蓮や佛は旅に出でにける
独言のほどの色なり秋の虹

トルソーに影のありけり衣被
名月や開かずの扉現れにける

卵卵卵いらんか施餓鬼寺
守口 柳川 晋

十七夜ぬけられますといふ迷路
拔露地のましら酒売る女かな

なんまん生面えゝ鷹匠町の鯛売
こいわしやあ塩して糠であぶりんさい

人の世の起承転結梧桐一葉
枚方 中野 京子

秋刀魚鰯開きにしたる思ひかな
今日をただ澄みわたりゆく日の出なり

言の葉を空からつかみ貝割菜
言葉なき言葉の重み柞の実
百噸の秋刀魚を揚げる大船渡
守口 岩下 芳子

パンパスの太きを引けば折れ易し
安治川のトンネルを出て十三夜

涌き水を飲んでここより秋遍路
大役を終へ新涼の化粧前
結核菌を元元

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」 観照

独身とはこんなもんかい障子貼る 前田美恵子
驚いた。なかなかこうあつげらんとは詠めない。二の句が継
げないところだが、敢えて一句：
〈母と子と妻のためなり障子貼る 将夫〉

龍淵に潜むや玉子安売りす 竹中 一花
「龍淵に潜む」は秋分のこと。「説文」の「龍は春分にして天に登り、
秋分にして淵に潜む」による。古典的な季語と「玉子の安売り」
とのギャップがいかに俳諧。

自然薯の曲りに詠のありにける 中田 禎子
自然薯の曲がり具合もさることながら、それを見て「曲がるに
もそれなりの理由があるのだろうな」と大真面目に考えている
作者がなんともほほえましい、森羅万象、みなそれぞれに意義
を持つて存在する。

十七夜ぬけられますといふ迷路 柳川 晋
わざわざ「抜られます」とことわつてあるところが実に「ユ一
モラス。迷路は先が見えないから迷路なのだが、初めから「抜
けられる」と分かつていれば、何の不安もない。十七夜は十五
夜より月の出が遅くなる。立待月である。迷路を抜けるのに少
し時間がかかるのだろう。

秋刀魚鱒開きにしたる思ひかな 中野 京子
秋刀魚や鱒を開きにしたような思いとほんんな思いか。腹を
割つて話をすると言うが、おそらく全てをさらけ出して開放さ
れたような思ひなのだろう。

パンパスの太きを引けば折れ易し 岩下 芳子
パンパスは芒に似た円錐花序をつけるイネ科の大型多年草。太
くて丈夫というのではなく、「太いのを引けば折れ易い」が本
質を突いている。

野分して心によぎる悉無律 西村 純太
悉無律は「刺激に対する生体反応は起こるか起こらないかの二
通りしかない」という法則。倒れた木もあれば倒れなかつた木
もある：そんな野分の跡を見て悉無律が心によぎつたのであ
う。

ストーンヘンジ何を語らむ月光に 岩月優美子
ストーンヘンジはイギリス南部にある巨石記念物。ストーンヘ
ンジは悠久の歴史の中で何を見、そして何を語ろうとしている
のか：月光に浮かぶ巨石を見てみると確かにそんな思ひが湧い
てくる。

稲の穂の出揃ひし田に音のあり 近藤 紀子
稲の穂の出揃つた田からは、穂の触れ合う音など、いろんな音
が聞こえてきそう。めでたい。(以下略)